

研究動向

キリスト教と文化

キリスト教と文化

橋本 典子

キリスト教を文化の中にいかに位置づけるかは西洋に於いても、また東アジアに於いても根源的な問題である。何故ならばキリスト教は科学を生み、キリスト教と近代科学は相互に影響を与え合いながら、様々の場で文化の発展を促してきたからである。他方でキリスト教はその地域に根づいていた土着の文化との間で対立、葛藤、闘争を生ぜしめた。キリスト教との協調と葛藤との歴史が、様々のレベルで文化を考察する上で研究には不可欠である。そのいくつかの側面を「キリスト教と文化」のテーマのもとに明確化したいというのがこの研究の主眼であった。特に現在 20 世紀後半のインターネットの世界になって「キリスト教と文化」の再考は、文化の普遍性と個別性(特異性)との構造的関わりの中で必要な研究である。

1997 年 4 月から 1998 年 10 月まで共同研究者 4 名は以下の研究分担に従って、西洋に於けるキリスト教の意味、西洋文化と東アジアの文化との出会いを明確化すべく、それぞれの視点から研究を行ってきた。

〔研究分担者及び研究題目〕

・橋本 典子

フランスに於けるキリスト教と 20 世紀哲学
— 人格主義及び倫理の問題

・前之園 幸一郎

イタリアに於けるキリスト教と子供

・八耳 俊文

東アジアの科学史とキリスト教

・大野 芳村

17・18 世紀フランスに於ける宗教画制作

研究分担者は研究に必要な文献図書や資料を収集し、また外国出張の際には海外の研究者と情報交換をした。1999 年『総合文化研究所年報』にそれらの研究成果を発表する予定である。

1997 年 4 月より 1998 年 10 月までに、学外から講師を招き 10 回の講演会を開催し、「キリスト教と文化」のテーマにつき研究を多面的に且つ深めることが出来た。

1) キリスト教神学研究

1997 年 7 月、今道友信「キリスト教と文化——三つの文化的印章〈十字架、主日、時鐘〉」では、キリスト教に於ける十字架、主日、時鐘の神学的意味とその文化的所産、今日的意味を明らかにし、1998 年 4 月には金山椿「ウルス・フォン・バルタザールの神学的美学」に於いて 20 世紀の神学に於ける典禮の重要性と現代の神学的美学の可能性と意味について論じた。

2) キリスト教と科学

1997 年 10 月、松永俊男「19 世紀における科学と宗教」に於いて科学と宗教との様々な関わりをダーウィニズムの視点から考えた。丁度ローマ教皇庁からダーウィニズムに対する見解の発表の後で興味深かった。

3) キリスト教と美術

1997 年 7 月、小池寿子「中世美術における〈死の舞踏〉について」で死の図像学を通して死生観を考え、人間と宗教との根源的な関係を認識し、1998 年 10 月、大原まゆみ「近代ドイツに於けるキリスト教美術の世俗化」によって宗教思想や宗教的表現が「世俗化」されながら、宗教からの距離づけの歴史的過程を絵画によって実証的に示した。

4) キリスト教に於ける〈言葉〉と対話

1998年3月、樋笠勝士「アウグスティヌスにおける〈言葉〉の問題—〈言語〉についての見取り図を描く試みとして」に於いて、アウグスティヌス「告白」の「受肉したロゴス」を出発点に内なる言語のあらわれとしてのキリストをアウグスティヌスの言語論に基づいて明らかにした。1997年11月、チェレスティーノ・カヴァニャはキリスト教と他の宗教との対話の実践面を報告した。

5) 東アジアに於けるキリスト教受容

1998年7月、吉田寅「中国に於ける近代科学の受容とキリスト教」、1998年5月、李楠永「韓国に於ける儒教の受容の問題」に於いて前者は明代から中国が近代科学をどう受け入れたか、当然キリスト教も副産物として受容したがこれを歴史的に明らかにした。また後者は現代の韓国に於けるNew-Confucianismの問題を論じた。

我々の研究グループはその特徴のひとつに研究分担者のそれぞれが個別テーマについて研究すると共に4名の共同テーマとして「キリシタン研究」を行いキリシタン関係資料を収集した。

6) キリシタン研究

1998年7月、今道友信「キリシタン文化について」によって「ドチリナ・キリシタン」研究、カテキズム、キリシタン研究の現状を学んだ。

キリシタン研究に伴って1997年度関西調査旅行、1998年度は長崎・五島調査旅行を行なった。

「1998年3月6日午後2時より、神戸市博物館に特別観覧をお願いし、同館収蔵庫で、南蛮美術と日本近代の洋風画を中心に調査をした。

16世紀末から17世紀初めにかけて多数制作された南蛮屏風の遺品は現在60数点を数える。いずれも日本へのキリスト教布教を題材に描かれたもので、同館が所蔵する作品は「神戸市博本」と

して知られる優品である。右隻には日本の港に着いた南蛮船とカピタン一行の上陸の景が、左隻には異国の地を出港する南蛮船の様子が描かれている。同時期に制作された洛中洛外図と共通する金地を背景とする構成に、登場人物の衣装や南蛮寺などの風俗が精緻に再現されているのが、作品を間近で観察することによって確認できた。

一方、同館所蔵の平賀源内「西洋婦人図」と司馬江漢「異国風景人物図」は、長崎を經由して西洋画の技法が積極的に摂取されるようになった最初期の作例である。物珍しい風俗への関心を越えて、油彩や陰影法といった素材や表現技法についての西洋絵画の本質を、源内らが手探りながら究めようとした経過を知ることができた。」(大野 芳材記)

「堺は中世には貿易船の発着港として栄え、自治都市を形成したことで知られる。仁徳陵向いの堺市博物館を訪れた後、堺市内の史跡を巡った。市内には中国や東南アジア貿易で賑わった頃の史跡が多く、「東洋のベニス」とも呼ばれた活況が想像できた。サビエルも来堺しており、彼が滞在した豪商日比屋了慶の屋敷跡は現在ザビエル公園となっている。茶人千利休や武野紹鷗は共に堺商人であり屋敷跡も訪れた。臨済宗の寺、南宗寺に武野紹鷗、千利休を初めとした千家、津田宗達らの津田一門の墓碑が立つが、この境内でキリシタン灯籠を発見したのは驚きであった。旧鉄砲鍛冶屋敷では当時の堺の近代技術を受容したその技術の高さとスケールの大きさをあらためて認識した。」(八耳 俊文記)

「〈キリシタンの事跡についての長崎・五島調査旅行〉 潜伏キリシタン達は、厳しいキリシタン禁制と弾圧のもとで、数百年にわたりその宗教的良心を守り続けてきた人々である。彼らは、今日、我が国の憲法において基本的人権の主要な基本原則とされる「思想及び良心の自由」(第19条)ならびに「信教の自由」(第20条)

について、既に封建体制下で体を張って主張したのであった。その潜伏キリシタン達の事跡を訪ねるために、長崎市、長崎県西彼杵郡外海町、五島列島への3泊4日の現地調査を行なった(調査期間は1998年7月19日から22日)。

第1日目は、太田尾カトリック教会の中田神父の案内で外海町の枯松神社(キリシタンを祭る珍しい神社)ならびに外海町立の歴史民俗資料館、ド・ロ神父記念館を見学。

第2日目は、崇福寺(1629年建立、媽祖^{まそ}信仰をもたらし、天上聖母、順風耳、千里眼などの神を祭る。)大光寺の本木昌造の墓、如己堂(帳方屋敷跡、永井博士が42歳で死去した場所)ベアストさまの墓、サンタ・クララ教会跡、大浦天主堂、神の島教会、唐人屋敷跡(土神堂、天后堂)。

第3日目は、浦上天^{うらかみ}天主堂。日本二十六聖人記念館(三尺牢、フレスコ画「長崎への道」長谷川路可)。五島・奈良尾への移動。頭ヶ島教会(上五島空港近くにある石造りのがっしりした教会)。青砂ヶ浦教会、大曾教会、鯉ノ浦教会とルルド、福見教会(大正2年(1913)建立の赤レンガ造

り、天井の高さと鮮やかなステンドグラスを持つ)。桐教会(白い近代的な建物)。

第4日目は、五島観光歴史資料館(城を復元した建物。倭寇、遣唐使、隠れキリシタン等の資料)。福江城跡。五島邸心字池。武家屋敷通(ふるさと館)。堂崎天主堂(くるす地頭、携帯用祭壇セット)。岐宿町の水ノ浦教会(ルルド)。魚津ヶ崎(ぎよがさき)公園、(遣唐使が発したところ)、楠原教会、鑑瀬展望所(殿様が婿に反逆されて逃げる途中で鎧^{あぶみせ}が切れて自害したとされる場所)。

今回の旅行で訪れたすべての場所に、キリシタン達によるくさるべ・れじいな>の祈り「この涙の谷にてうめき、泣きて御身に願ひをかけ奏る」が、痕跡をとどめているように思われた。」

(前之園 幸一郎 記)

今年度残りの期間のうちに12月21日、塩川徹也「古典期フランスのカトリシズム―教会・神学・信仰」、1999年には熊田陽一郎「ディオニュシオス・アレオパギータ」の講演を予定している。

女性とことば

1960年代のフェミニズム運動の刺激を受け、1970年代には女性語の研究がアメリカでまず盛んになり、その後、世界の国々に様々な影響を与えている。本研究グループは日本語、英語とフランス語の女性語の問題に関して、個々のメンバーが設定したテーマに基づいて研究を進めている。

(高野 嘉明)

1. 首都圏大学生における「呼称」

1.1. はじめに

ある人物が、どのように呼ばれるかは、相手や場面によって異なってくる社会言語学的要因が

強く働く言語事象である。また、日本語を対象とした先行研究から、呼称には男女差が含まれることもわかっている。このことなどから、「ある人物がどのように呼ばれるか」を「呼称」として、「場面差」・「性差」・「立場差」による違いを具体的なデータから考察することを本研究の目的とした。近年、男性語・女性語の歩みよりがさまざまな観点から指摘されており、男女差を含むとされてきている「呼称」においても、歩みよりが予測される。その歩みよりの実態についても観察するため、調査対象を首都圏大学生(短期大学生を含む)とした。本中間報告では、データのごく一部のみを分析し、首都圏大学生の呼称使用における男女差のみられた呼称の実態に

ついて述べる。

1.2. 調査概要

調査概要は、以下の通りである。

調査期間：1997年9月～10月

被調査者：首都圏の大学・短期大学に通う男女大学生約200名

調査校内訳（所在地）：青山学院女子短期大学
国文学科2年生（東京都渋谷区）、秋草学園短期
大学国文学科2年生（埼玉県所沢市）、大妻女子大
学文学部国文学科2年生（埼玉県入間市）、早稲
田大学第一文学部日本文学専修2・3年生および
同大学第二文学部1・2年生（東京都新宿区）

調査方法：アンケート方式（教室における集団
記入方式）

調査項目は、以下の①～④の通り。

- ①フェイス項目：学校、学部、学年、専攻、氏名（読
み仮名）、性別、生年（満年齢）、居住歴、アル
バイト（勤務）経験の有無、アルバイト職種
②ある場面で用いられている自分の呼ばれ方（複
数選択・一部記入）：「場面」・「性別」・「立場」を統
制した16場面を設定、以下のa～lから複数選択・
記入という形式の項目。頻度によって異なる記号に
よる選択を求めた（○：普段そう呼ばれる、△：時々
そう呼ばれる）。項目ejklについては、（ ）内に具
体的例の記入を求めた。

項目：a. 姓+さん b. 姓+ちゃん c. 姓+君
d. 姓呼び捨て e. 姓+その他（ ）
f. 名+さん g. 名+ちゃん h. 名+君
i. 名呼び捨て j. 名+その他（ ）
k. 愛称（ ） l. その他（ ）

場面：「場面差」：友人知人場面、教員場面、
職場（アルバイト）場面

「性差」：同性、異性

「立場差」：友人知人場面：同学年、
学年上、学年下／職場場
面：同輩、先輩、後輩、上司

- ③嫌いな呼称／好きな呼称：それぞれ、有無・具
体例・理由を自由記述形式。

- ④呼称一般における気づいた点を自由記述形式。

1.3.1. フェイス項目

早稲田大学第二文学部1・2年生21名におけ
る結果を以下に報告する。内訳は1年生14名・
2年生7名、性別は男性14名・女性7名。5歳
～15歳の言語形成期を過ごした地域は、首都圏
（東京・神奈川・埼玉・千葉）14名・首都圏外関
東地方1名・東北地方2名・中部地方1名・近畿
地方1名・中国地方1名・不明1名。アルバイト
（就業）経験のない学生は1名のみであった。

1.3.2. 男女差のみられた呼称

16場面のうち、 χ^2 乗検定の結果危険率5%
水準で有意差のみられた呼称は、次の通り（（ ）
内は場面数。場面の内訳については省略）。

① 女性に多く用いられた呼称：姓+さん（7）、
姓+ちゃん（2）、姓呼び捨て（2）、名+ちゃん（1）

② 男性に多く用いられた呼称：姓+君（5）、姓
呼び捨て（2）

「姓+さん（女性）／姓+君（男性）」という振
り分けは、東京都内の中高生男女にとって担任
教員からもっともよく使用される形式、という
尾崎喜光の報告と連続した結果となっている。
女性にのみ多い形式に「姓+ちゃん」「名+ちゃん」があり、女性に対する呼称として「ちゃん付」
と「名」の使用に特徴があることが推測できる。
また、男女ともにみられた「姓呼び捨て」は場面
が異なる。女性においては「教員・異性」と「職
場・同輩・異性」場面で、男性は「友人知人・同
学年・同性」と「友人知人・学年上・同性」で互
いに有意差をもって多く用いられている。ここ
から「姓呼び捨て」は、女性の場合は異性から、
男性は同性からの呼称として多く用いられてい
ることが分かる。

（田中 ゆかり）

2. 明治の女性の文章

女性が論説文を書くようになったのは、もちろ
ん明治以後である。どのような用語、文体で明治

の女性が文章を書いたか、それが男性の同種の文章とどのような点で異なっていたか、が当面の研究テーマである。

明治の女性の文章を多く載せた雑誌に、明治18年から刊行された『女学雑誌』がある。この雑誌には様々な女性が文章を書いているが、論説文という点で注目されるのは清水紫琴（古在豊子）である。伝統的に論説的な文章は、漢文訓読の影響を受けた漢語多用の文体で書かれて来た。彼女も、基本的にはこの男性的な文体を用いて書いている。たとえば、「何故に子女は政談集会に参聴することをゆるされざる乎」では、自称詞に普通男性専用語と考えられている「予」「予輩」を用いる。訪問記や読者の質問に答える場合は「私」「妾」「妹」などを用いているので、文体によって複雑な使い分けをしていることが分る。

（出雲 朝子）

3. 英語の話し言葉における男女の相違

今回の研究ではスピーチアクトにおける英語を母語とする男女の差を分析する予定である。日本の英語教育は基本的に英語は性的に中性なものとして行われているが、本当にそうであろうか。スピーチアクト、すなわち謝罪、要請、断り等の、会話での言語行為においては、男性が一般的に用いる表現方法と女性が主に用いる表現方法には何らかの違いがあると予想される。この問題に関し、アメリカ映画のビデオと脚本を資料として、表現の婉曲性または直接性、丁寧さの度合、文の長さ、使用語彙等の観点から、男女差を具体的に特定する予定である。また、ターンテイキングやオーバーラッピング等の現象における男女それ

ぞれの特徴もあわせて分析したいと考えている。さらに、資料の分析の過程でこれら以外の男女差が見つかれば、それらもあわせて報告するつもりである。

（黒岩 裕）

4. 語彙の女性化—職業と名詞の性

フランス語のあらゆる名詞は、男性または女性のジャンル（性）を有する。身分、職業、国籍等を表現する語彙についてもその例外ではない。しかし永い間、伝統的に男性のものとされていた職業を表す名詞には女性形を持たないものがある（弁護士 *avocat*、医者 *médecin*、教授 *professeur*）。

かつて、*avocate*のような女性形が創られた経緯があるが、女性弁護士自身がその呼称の使用を好まず、男性形のまま使用しているという現実があった。すなわち男性と対等であるという女性の意識自体が、女性形の普及を抑制し、伝統的な男性形が用いられてきたことは否めない。

ところが最近の傾向として、その分野の名詞の女性化が見られる。ある女性の大臣が自分を *la ministre* と呼ぶように希望して以来、この傾向が顕著になったとも思えるが、この傾向を新聞 *Le Monde* 紙等の記事を資料として探りたい。この動きが一時的現象なのか、あるいは新しい方向づけの胎動なのかに関する結論を出すのは時期尚早であるかも知れないが、まずは現状を資料によって分析、検討することから始める計画である。

（鈴木 律子）